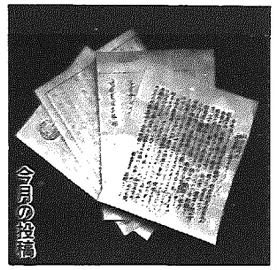


街かど

●「街かど」は皆さんのページです。皆さんからの投稿は原則として、必ず掲載します。スペースの都合で一部省略する場合があります。
●募集するものは町に対するご意見、ご要望や、短歌、俳句、川柳、詩、絵画、イラスト、写真などの作品、その他です。
●原稿の返却を希望されるかたは、郵送料を同封してください。
●文字を書くのはどうも苦手、というかたは電話してください。取材に伺います。
●氏名などを公表したくないかたは匿名にしますが、編集部へは氏名、住所、電話番号を知らせてください。
●投稿・連絡先　黒埼町大野二八四三-一黒埼町役場企画開発課広報くろさき「街かど」係　☎七-三一〇一

経営研修会に集ろう ―MIA研修スタート―

黒埼青年会議所
経営開発委員会
大野　丸山澄男

本年度から黒埼青年会議所に経営開発委員会が設置され、年間を通じて経営に関して委員会メンバー全員が取り組んでいきます。商工業、農業を問わず経営に対して興味のあるかたならどなたでも結構です。広く参加を求めます。

経営とは卒直に申し上げれば、自分自身との戦いと同時に自身の自助努力にほかならないと思います。このことを前提として、MIA（マネージメント・イン・アクション）というすばらしいプログラムが幾多の改良を重ねて開発されました。

MIAは「自分は経営者としての資格があるのか」という問いかけから始まります。㈳日本青年会議所の一九七二年度第二十一代会頭の故小野正孝氏（長野青年会議所出身）が生み育てあげたものです。

故小野氏は「経営の大黒柱として皆に頼りにされる人材になるには」「何かすばらしい経営者を育成するプログラムはできないのか」と考え、六人の青年たちとプログラムの開発に着手しました。

その中で青年会議所の会員の経営分析では、①会員の九五%が中小企業の出身、②それもたんに社長の息子というだけの経営者であり、③地方の企業であることがわかりました。

二世経営者の弱さとして、先代より経験がなく、目標、目的、展望に欠け、一本の太い背骨（経営哲学、経営理念）を持っていない。積極的行動に出ず、優柔不断な人が多い。自分自身を動かせず、どうして人や企業を動かせるのか、と故小野氏は説きました。

氏は全国で六百の青年会議所を回り、二万人の対談集会を開きました。一年間で七百回の講演を開いたときます。このため、過労で四十二歳でこの世を去ったのです。

MIAは一人の男が命を賭けて生み残した宝物であります。皆様がたと修練していきたいと思っています。左記のとおり開催しますので、関心のあるかたはぜひご出席ください。多くの参加をお待ちいたします。

MIA合同研修
とき…二月十五日㈯午後三時から十六日㈰午後六時まで。
ところ…黒埼町商工会研修室
申し込み　二月七日㈮までに青年会議所へ（商工会館内☎⑦3155）

情緒ある港町・新潟

鳥原本村　六十七歳　佐藤柾次郎

わたしが新潟に転勤したのは、昭和四十五年一月。三井東圧からの出向で、三国コカコーラ新潟支社並に工場の建設要員として単身赴任だった。

大成建設の幹部社員らとプレハブの中で管理業務をしていた。建設が急ピッチに進行するなか、連日九時、十時まで残業が続いた。下宿に帰り冷えきった夕食はほんとにわびしく、味気なかった。ときたま女中さんが卵にマジックで「ご苦労様」と書いてくれ、何よりの慰めであった。

工事が進むにつれ仕事も軌道に乗り、わたしにも少しずつ心に余裕ができた。ある日、誘われるままに新潟の夜の散歩としゃれこんだ。

仕事に忙殺され、赴任して一度も新潟の街を見たことがなく、初めてであったが、このときほど新潟の夜の美しさを感じたことはない。

黒々と沈む信濃川を挟んでネオンの光が両岸を埋めると新潟の夜が訪れる。車のヘッドライトが白い光の線を引いて、消えるあたりは古町にある夢の小路の数々。伝統の長い大きな料亭の門、小粋なのれんの店、思い思いのバーの名前が星空まで続く。待ち合いの打水した格子戸、豪商の蔵を北欧風にデザインしたクラブ等々。

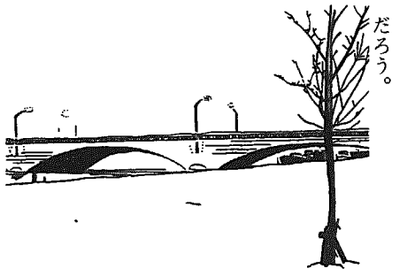
古い新潟も新しい新潟も、実に美しく宵化粧して待つ小路、夜が長い新潟は夜深けるほどに外の灯りを内にこめさせて、しっとりと息づき果てることを知らない。港町の新潟の夜は実にすばらしい。

また、忘れられない新潟の味の一つに春の素魚（しらす）がある。三面川の冷たい水を産卵にのぼって来る小魚だと教えてもらった。生きたまま醤油をかけてするとき、雪で洗われてきた新潟女の白い肌となよなよとして「シン」のある姿を思わせる。口の中でとろりとする南蛮海老も北の寒さが赤くさせたようで、暖めてやりたい古風な風情を寄せる。素朴な田舎料理は旦那を大切にした越後女の深い情が作らせた味だという。新潟の夜の味はまさに男心を締めつける味であるといえよう。

言い忘れていたがもう一つ、新潟は実に美人が多い。日本風の女がトップモードを着こなしていたら、生粋の新潟っ子と思っていい。この顔立ちの娘たちは、磨くほどに美しくなって夜の新潟に散りばめられる宝石となる。

流ちょうな標準語を話すかと思えば、突拍子もない感嘆詩の入った新潟弁を話してくれて底抜けに明るい。が、ときとして花嫁人形のような涙をネオンの影で流す。キチンと着物などを着ると古風な新潟女の横顔をみせたりし、忘れられない余韻を残す。

新潟は明治、大正、昭和にわたり、全国から数多くの作家や詩人、政界、財界の重立った人たちに親しまれたのも、このような所以があったからだろう。



漢詩

愚感　板井　萩野　覚心

朋友爲黄泉幾霜　ほうゆうこうせんとなりていくさいげつ
坐懐竹馬幼蒙望　そぞろにおもうちくばようもうのぞみ
浮雲夢如愁人世　ふうんゆめのごとくひとのよをかなしみ
明鏡裏煩耄憐相　めいきょうのうちはんもうのかたちをあわれむ
陽韻　※黄泉…あの世　幼蒙…老人　煩耄…わずらわしい

短歌

短歌会

杉山に一本紅き山うるしたけなわの秋に歩調を早む　宮田　ミイ
藤椅子も片付け終えて香りよき緑茶を一服しみじみとのむ　堀内　昌江
秋の夜を折り折り覚めてわが夫の逝きし日よりの日数を数う　金内　セツ
粟島の背の茜たちまちに闇となりたり漁火つづく　小出美喜子
古代人の住居が下に眠るという舗装の道に仲間らと立つ　泉井　ヨ子
（黒埼の史跡をめぐりて）
紅葉せる五頭林道の沢の辺に珍しきかな雉子一羽飛ぶ　柏　直樹地
のめりこむ姿勢となりて薯を掘る人を見て過ぐ夕暮れの道　阿部　淨子
岩山をそがいに立てる大きなる胎内観音に避雷針見ゆ　橘　芳園

詩

糸の切れた凧

興野二区　小林

あの日
私の手元からプツンと糸を切って
飛んで行ってしまった凧
どこへ行ったのだろう
悠々と大空を遊泳してるに違いない
あのやつ

あの日
私にからんで解けない糸を面倒がって
切ってしまった凧
どうしているだろう
どこかに引っ掛かっているに違いない
あのやつ

あの日
私は切れかかった糸をなぜ結び直して
おかなかったのか、あの凧
どうしてだろう
今頃きっと帰りたいに違いない
あのやつ

朝

長谷川節子

静かな朝
何もない朝
ただ無限の世界に
時間だけがとおりすぎる朝

穏やかな朝
朝の光にそまりゆく自分自身
おはようございます

いつもの人々
おはよう
そして
今日が始まる

俳句

黒埼俳句会

親心送し神に頼みけり　那須野宗一
小雪舞う空に響きて弓の絃　神原　孝子
そっと持つ指にくずれし熟柿かな　小泉　翠
幾度も炬燵で語る童話かな　斎藤　モト
渡る鳥大群小群ただ渡る　菊地八重子
鮭川に魚跳ね上がる影よぎる　鷲頭　静江
白鳥の声あり月のあるあたり　木下　富代
落葉打つ雨を聴きつただ寝まる　高橋　睦治

残菊や色それぞれに枯れはじむ　滝沢　ちえ
外灯のそこのみみぞれあとは闇　早川　ウメ
流し網鮭舟小舟川寒く　田辺　正二
女客木の実の酒に柿サラダ　浅間　シゲ
風にゆれ竹しなわせて烏瓜　長谷川一定
眠る山背にうす暗き無人駅　斉藤　美芳
雷の遠のきてより霙かな　白川　代香

本年も投稿をお待ちしております。